主人公の職業

――Ⅲ　ハンス・カロッサの場合――

須磨一彦

一　『ドクトル・ビュルガーの運命』

（一）まえがき

フランスのサヴォア出身の曾祖父ゲオルク・カロッサは、一八一七年にイン川の谷間に外科医として定住した。彼は外国人だったにもかかわらず、速やかに富を肥やし、知名度を高めた。老年期を迎えた彼は奇妙にも医者を廃業して、タバコ工場を設立した。彼の息子カールは父の跡は継がず、農業と写真家を兼業した。父カールは息子のカール（同名）もまた父親の職業も祖父の職業も継がないことを賢明なことと思い、聖職者にすることにしていた。しかし、祖父の遺伝はこの父の願望よりも強かった。なぜなら、カールは聖職者の誓いを立てずに医学を専攻したから

だ。彼の息子ハンスは、医学勉学中の早い時期に、バート・テルツで婚約者マリーア・フォッゲンライターとの間に生まれた。テルツでの八年間の幼年期以後は、ニーダーバイエルン州の、先ず最初は父の転任によってピルスティングで二年間を過ごし、次いでランツフートのギムナジウムに入学して学生寮で六年間を送った。これら二つの町は支流のイーザル川に沿っているが、ハンスがギムナジウムを終えた一八九七年には、ドーナウ川本流に沿ったゼーシュテッテンに母が相続した農場に移転していた。

ハンスの志望は詩人になることであったが、両親の希望によって医学部へ進学した。留年を含めて六学期間在学してミュンヒェンでの前期課程を終え、ライプツィヒと、次いでヴュルツブルクへ移って勉学を継続したが、肺病のために中断し、医者になってよいのかどうか、疑心暗鬼を生じた。しかしながら、一九〇二年に学業を再開し、その三年後に修了試験を受けて医学博士号を得た。

父はこの間にパッサウで医院を開業していたので、息子に代役をさせたがった。息子の方はこの立場を逃れてドレースデンで自分の医院を開業したいと思ったが、暫しの後、肺病が再発してこの期待は水泡に帰した。回復後ハンスはパッサウの父の医院を引き取った。なぜなら、父はこの間にミュンヒェンに別の医院を開業していたからである。

（二）当時の肺病治療

ハンス・カロッサが生まれたのは一八七八年であり、ローベルト・コッホが結核菌を発見したのはその四年後の一八八二年だった。その八年後に同じコッホによってツベルクリンが治療の可能性のある薬として発表されたが、これ

は治療薬ではなく、陽性か、陰性かを判定する判定剤である。有効な治療剤として使用されるようになった最初の薬は一九四四年に発見されたストレプトマイシン（ＳＭ）で、同じ頃パス（ＰＡＳ）も発表された。一九五五年になると、ヒドラジッド（ＩＮＨ）を加えたＳＭ、ＰＡＳ、ＩＮＨの三剤併用療法が完成し、さらに一九七〇年代に入ると、リファンピシン（ＲＦＰ）、さらにピラジナミド（ＰＺＡ）が加わり、化学治療は万全となった。

このような治療法にまったく手の付けられていない状態は、第二次世界大戦後まで続いたであろう。古代から貴族階級の間では大気、栄養、安静療法というものは行われていた。このような療法を中心とする療養所治療が開始されたのは一八七六年で、ドイツ人のデットゥヴァイラーがタウヌス山地のファルケンシュタインにこのためのサナトリウムを建設した。サナトリウムでの療養生活の実態は不明だが、トーマス・マンの小説『魔の山』の舞台、ダヴォースのベルクホーフは好個の範例である。一九一二年と翌々年の二回、ここに入院したカトゥヤ夫人に三週間付き添った経験を作品に生かしたものである。作品では、ハンブルクからダヴォースへ従兄のヨーアヒムをハンスが見舞いに行く旅から始まる。しかし、ここで展開されるのは、サナトリウムの実態ではなく、国際的な精神の交流と陶冶である。

（三）作品の流れ

医院の所在地は、フィルスホーフェン（ドーナウ川にイーザル川とイン川が流入する中間点あたり）のパッサウ寄りの右岸にある小村ゼーシュテッテン。

七月三〇日。村の娘（1）が胸の診察を求めて来診。心臓の真上に広く深い崩壊を発見。後、余命数週間と予測。

医師の診察の所作に誘発されて爆笑し、激しい咳の発作。

八月二日。この五年間に村には新築の家が増えて様子が変わった。それと同時に、医師の心も変容した。以前は何の躊躇いもなく治療に献身できたのに、今では間もなく身近で現実となる他人の運命が彼自身の運命に作用しそうな予感がして気乗りがしないのであった。

医術が延命策に過ぎないことは自明なのに、なぜことに当たる度に良心の疾しさが強まるのだろうか。

八月八日。肺病患者とその治療法に一身を捧げよ、というのが父の遺言だった。初年度は来患数が限られていて忙しくなかったので、余裕をもって職務に専念できて満足感も覚えたが、評判が立って待合室が常時満席状態になると、作業が重くのしかかってきて、患者が吸血鬼と化したのである。

八月九日。彼は毎日、科学者や発明家が大につけ小につけ世界についての知識をどこまでも拡大しているのを目にする。なぜ、それが彼にだけはしばしばこうも狭くなるのか。彼にはいまだに夢中になれるような魔神との接点はない。

八月一二日。旧市街の靴屋（2）が往診を求める使いを寄こした。病人はすでに一カ月床に就いている。彼は体を動かそうとするたびに咳き込んだ。病室の壁には一枚のマリア像とその上に礼拝堂でよく見かけるような図版が掛けてある。二年前にこれと類似の絵と三本のロウソクを奉納教会に寄進したが、経験から判断して吐血のような死の危険から救出してくれるのは聖母の恩寵を措いては他にないとの確信によってである。その後の吐血に際しても医者を呼んだことはない。今回は自分の咳が妻の安眠妨害にならないように措置してほしいためである。

彼の病歴を聞き流しているうちに奇妙にも話に乗せられて、臨終をできるだけ楽に迎えられるよう、むしろ快癒へ

たどり着ける病人のように待遇する決心をした。そして必要があれば保険の手続きの世話をしようと申し出たが、その依頼もなければ次回の往診依頼もなく縁は切れたように思われた。

八月一三日。昨日往診した患者が心を離れず、救えない患者の存在を書きつける。

八月一五日。いま患者が彼のことで褒めてくれる落着き、「仏のような忍耐」、それがどんな絶望を経験した結果かを知る由はあるまい。

九月一日。正気を失ったように騒ぎ立てる小柄の老女（3）がまたもや来院する。訴えによると、喉の奥にガラス片が刺さっていて、風が吹くとそれが喉を塞いで窒息しそうになる、と言う。

九月三日。朝はおのずと乗り気になって人々に交わり、多くの人を慰め癒し、晩には心置きなく立去るような心の持ち主でありたいと願った。

九月八日。彼は患者たちに対して、彼らの容態や自分の療法について嘘を付いたり何もしなかったことにして騙さざるを得ないことがよくある。それが日常化し、惚けることが本業となり、何の恥も感じなくなったとしたら、それでもなおどこかに高貴な自我への道はあるのだろうか。

詩人ゲオルク（有名人ではない）の同年九月二〇日の手紙から。「昔は祖国のために倒れたり、新しい思想のためには火刑をも辞さないことは偉大なことであり、賞賛に値することであった。しかし、世相は変わった。……今日では勝手な夢に熱中して身を焦がし、死に際になってから、その先は穏やかに光る星となって地球を回るような歌を口ずさむことが大胆であり快適なことなのであろう。」

一〇月六日。薬を調合してやる度に、これは全く無害ですか、毒は入っていませんか、と尋ねる患者がいるが、こ

れはどんな人間なのだろうか。どうやっても害のない、どのようにでも使えるような力がありうるかのように。生きとし生けるものは、生きていたければ、秘められた体中で日々刻々、毒素を十分に生み出し取り込んで活用する必要がないかのように。

一〇月一〇日。時折、一日が世間にとっては荘重に、彼にとっては心配事を抱えたまま暮れて行く頃、冗談半分にもう帰って来ないのではないかと思いながらふらりと町を出る。

森林の繁った山の背の上に空き地があり、瓦礫が散らばっている。……空き地に弧状を成して繁茂したオークが林立し、斜面の上端で尽きており、斜面は抉れるようにして石河原に下りついている。ここはぞっとするような場所である。下界を覗くようにして遠くまで見渡すことができる。ここにしばしば彼はわくわくした気持ちで佇み夕闇が町と谷と川を覆ってゆく有様を眺め、それから小さな灯火があちこちに灯り、それがゆっくりと美しい地上の星となり、それがやがてゆっくりと繋がりあって、地上の星座のようになると、オーなんと彼の心には天空の星座への強い憧れが呼び起こされることであろうか。

このような夕方の暮れゆく風景の荘厳さを泉の聖水のように汲み上げて愛する人に手渡すことができたなら。

一〇月一五日のゲオルク・R宛の手紙から。

わたしは決して孤独ではありません。なぜなら誰でもわたしのところへ来院してよいのですから。……ナイトベルが鳴れば、待ってましたとばかり眠気を振り払い、感染の危険を顧みずに往診します。予想外の患者に対してこそ特別な配慮が働くように心掛けています。

一〇月二〇日。クリングホーフ（居住地ゼーシュテッテンから数キロ下流の村）の患者を診察するため、午後の蒸

気船に乗る。すると、数分遅れて乗船してきたのは、その妹が彼の父親の治療によって快癒したという僧正である。僧正は父を見習うように説教する。

一〇月二三日。ここ二週間以来、彼には心を打ちこめるものができた。それはローザ・エーガー（4）という陶工の幼い娘である。母親が診察時間に連れてきた。所見では、治るか治らぬかの境目にあるゆゆしい容態だった。ベッドから出さず、安静を守らすようにと母親に注意した。この日は頼まれもしないのに自ら往診した。ローザの住まいは「水車の谷」と呼ばれている森の中にある。ローザはベッドから出て、床の上で弟妹と水と砂でままごとに興じていた。ローザは医者の姿に気づくとあわててベッドに転がり込んだが激しく咳き込んだ。診断すると、左肺の半分が侵され、熱があり、脈拍も早い。

一一月六日。教授の息子（5）の治療にも当たっていた。白くて苦い錠剤の投与のお蔭で快方へ向かい、熱、咳、血痰も減っていた。ところが、この家庭の以前の主治医ドクトル・ヘールニヒトとの間には見解の相違があることがふとしたことから判明し、ビュルガーの信頼が失われた。

一一月一二日。豊富な銀色がかった金髪を編み髪にした、左の瞳に白い斑点のある変わった女（6）が二度目に来院した。遅くなった夕刻の来院の言い訳や、思わしからぬ病状を訴えた後、診断を求めながら着物を脱ぎ始めた。彼女の最初の来院の時と同じ不安と恨みが心中に沸き起こった。医者は女性患者の好意を間違っても受けてはならない、という父親の訓戒が実感を伴って甦ってきた。彼女が両腕を差し出して体を前に傾げたので、髪の毛が触れ合った。その瞬間、電話が鳴り、ローザ・エーガーの父親からの緊急の往診依頼だった。

その瞬間、風変わりな美しい女との接触が寸前で途切れてしまったことが悔やまれた。

この晩の往診については報告がない。それから一カ月後に教授夫妻から、五歳になる息子ルードルフの診断依頼があった。ビュルガーと交替して主治医となったドクトル・ヘールニヒトだったが、このドクターは見限って、今後の来診を断ったという。ヘールニヒトの処方を参照させてもらうと、最初はチンキ剤と肺病用シロップとを処方していたが、効き目がないことを察し、ビュルガーが常用していた処方に戻したが、その分量はビュルガーの一〇倍を超えるものだったという。

それから二、三日後の一二月中旬のこと、夕暮れの市場の小路でビュルガーは老女に呼び止められた。一昨日吐血した彼女の家の間借り人である働き者の娘をぜひ診察してくれと家の中に引っ張り込まれた。ベッドに座っていたのは、劇場の座席で見たあの美人で、その名はハンナ・コルネート（7）だと分かった。彼女は左手を差し出して来診の礼を述べた。簡略な診察の後、仕事は一切やめるようにと言い、処方を書き、夜であっても直ちに呼んでくれと頼んだ。それに対して、彼女は細工中の婦人帽を示して、受注中のこれだけは仕上げさせてもらいたいと言う。

当日の夜半、呼び鈴に起こされたが、気のせいで、空耳だった。

翌日夕方、ハンナを往診する。彼女は体温計を脇に挟んだまま、眠たげである。処法に従って、吐血の再発を防ぐために、夜間に繰り返し与えられた麻酔剤のせいである。

それから一〇日ほど経った頃には、他の患者の往診が済んだ後、毎夕のようにハンナのもとへ足が向くようになった。しかも、診察の間だけでなく、一緒にいる時間が次第に長くなったのである。明らかに、ビュルガーはハンナから病の快癒以外のものを期待しているのであった。年末は二九日の日記が最後である。

元日にも彼女を訪ね、謝礼として銀杯をもらったが、この日初めてキスを交わしたことが後日明かされる。六日に

は、彼女のベッドの脇に座ってその銀杯を眺めていると、彼女がビュルガーの頭越しに窓際の本棚へローソクを差し向けたため、溶け落ちた蠟が彼の首筋に焼付くのを感じた。彼女はこれに気付かなかったが、彼には何らかの吉兆のように感動が走ったのである。

それから一〇日後のこと、彼女が「物語」とも「神聖な罪」とも呼んでいることを打ち明けたいと言った。

彼女には三歳の子供がいる。これは徴兵を受けて戦死した愛人との間にできた子供である。彼女がこの子を懐妊して間もなく、愛人は召集され、中尉としてナミビアへ送られたが、わずか二週間後に戦死ではなく、チフスで病死してしまった。胎児の認知は時機を逸して、ハンナ一人で責任を負わねばならなかった。しかし、これから生まれる子供だけが生きる希望となった。生まれた男児は、幸い生後二年目に、ストックホルムにいる既婚の姉が引き取ってくれた。一度子供に会いに行ったことを最後に話し終えるころには日が暮れていて、彼女の声は啜り泣きに変わった。いつしか心が一体となって抱き合い、ベッドに倒れて泣いた。

朝になって目が覚めると、二カ所から往診の依頼があったことが分かった。その一方はローザの親からのものだった。

ローザの診察後、未知の女性（8）の肺炎の治療についてドクトル・エーからの相談があった。エーは助言を求めながら、提案を聞き入れないので、ビュルガーは勝手に病人のもとへ行って、自己流に配合したアルカロイドの服用を勧めた。

この後で、ビュルガーは、自分がハンナの医者であることを忘れていたことに気付いた。薬の代わりに、彼女の健康を祈って一緒にワインを飲んだり、彼女の好物であるロシアの強い葉巻を手土産にしたりした。そして、彼女のま

すます死の光彩を帯びてくる眼差しに陶酔して、彼女の病身を忘れた。

翌日、今度はドクトル・エーと対診した。一夜のうちに薬効が現れていた。熱は引き、病める側の鈍い音も澄んできた。これを、エーは自分の処方による結果として自慢した。

その翌日、ハンナの病身のゆえの美しい現象に溺れていたことを反省して、突然変異の体で安静療養を厳命した。

翌日、午後遅くある村へ電話で呼ばれた。帰宅後、なお三〇分ほどハンナのもとで過ごす。

ビュルガーがゼーシュテッテンで開業したのは一八〇八年で、この日記の書き出しは七月三〇日であるが、今、翌年一月二六日になって、患者数は毎週増えている、他の医者から見放された近郊のほとんどすべての結核患者が来院したり、往診を求めるようになったと、明記される。

飛んで二月一六日、ヴァルトシュテッテンでの診療。ここで診断攻めに遭った。それで終列車に乗り遅れないよう気を使っていた。そして五時の馬車に乗った。しかし馬車は呼び止められ、農夫の若い娘（9）のところへ連れて行かれた。娘はすでに危篤状態だった。モルヒネの準備中に息を引き取った。それからしばらくして乗る予定の終列車の轟音の遠鳴きが響き去った。不便な村のことゆえ、その夜は、死んだ娘が寝かされている上の階の部屋に泊まることになったが、その夜の夢に現れたのも、診察椅子に上半身裸で座っているハンナだった。

二月二〇日。

丘陵の雪模様も解けて春めいた日。ハンナに散歩に誘われ、つり橋を渡り、岸に沿って歩いた。散歩中、彼女も自分の見た夢を語った。それはかなり険しい山へ登る夢で、ビュルガーがリーダー役だった。彼女が遅れると、激しく叱咤された。ビュルガーは、そんは夢を見るのは熱のせいだと慰めた。

三月一日。夕刻にハンナの家主の老婆が迎えに来る。発熱し、ひどい悪寒に襲われているという。駆けつけてみると、人の見分けがつきにくいほどの重症である。粉薬を水に溶かして飲ませたが、ビュルガーを父と呼んだり、母と呼んだり、白衣の看護師や、わが子のフランツなどが幻覚に現れて、譫言を繰り返す。

三月五日。ハンナには、もはや飲ますまともな薬はない。唯一の延命薬は毒薬モルヒネのみ。

三月二一日。G夫妻に関して。

Gさんを往診すると、彼はすでに外出後とのことだったので、夫人に挨拶しておこうとすると、養女のリダが入ってきた。リダはGさんの夭折した妹の私生児とのことである。そして、夫妻はこの妹に対して返済すべき負債があったため、リダの養育を以てこの返済に充てることを故人に誓約したそうである。しかし、夫人は利己的で狡猾な女で、ことに男児を生んでからは、リダの心を迫害したのである。もう以前から彼女の事が気にかかっている、という。そして、透けて見える黄色い肌や嗄れ気味の声を指摘。彼女の母親の死因は肺病だったこと、彼女にもその気があるばかりでなく、もっと奥深くに潜伏して。その上、彼女の大食ぶりを非難した。夫人は医者の誰かに肺病だと宣告させ、リダの周囲からの隔離を画策しているのである。聴診器を当ててみると、心臓の鼓動は力強く、正確で、肺も穏やかに健康な呼吸が流れていた。診察中に、呼び鈴が鳴って主婦は呼び出された。二人だけになってからの対話で、リダは取り巻きの偏見の影響で、自分も肺病だと観念しているが、診断では病気だというほどではなく、早熟な子供によくある程度の不安定感に過ぎない。何かあったら手紙を書いて相談するように。自分は大旅行を計画中なので、自分あてにではなく、友人宛に、とその名を挙げたが、リダはいうことを聴かず、ビュルガーの名に拘った。

四月二日。ハンナが勤めるM百貨店の従業員たちは、もう一人別の医者にも診てもらうか、それとも療養所に入る

かするようにハンナを急き立て、ビュルガーにもそれを了承できるかどうか打診されたので、彼は了承したが、彼女はビュルガーに拘って、同僚の配慮に応じなかった。

四月二五日。ハンナはもう発熱しないが、心臓の動きは早くて弱い。彼女は日中、子供のフランツと一緒に公園にいる夢を見たが、夕方にはもだえも苦痛もなく安らかに永い眠りについた。

四月二七日。この日、ローザ・エーガーも後を追った。肺の方は最近落ち着いていたのに、流行中の猩紅熱に感染して死期を早めたのである。

四月三〇日。往診の途中、村の墓場のわきを通った。するとちょうどローザの遺骨の埋葬中だった。墓場は丘状になっており、学校の生徒たちが参列していたが、埋葬される生徒の死因が伝染病であるため、彼らは墓場の外で待機しなければならなかった。しかし、野草の花を手にした一人の男子生徒が人をかき分けて塀の前へ飛び出し、墓穴めがけて花束を投げ飛ばしたが、それは目標に届かず、手前のハンナの墓上に落下した。

五月三日。ハンナの小さな墓にはビュルガーが置いた常緑の花輪だけしかない。彼女は生前、頼まれて手芸の婦人帽で多くの婦人を飾ったのに、今、その返礼に訪れる者はいない。

（四）まとめ・A

患者（1）来診した村の娘。頻脈、息切れ。痙攣的な咳。心臓の真上に深い病巣。余命数週間。再来なし。

患者（2）求められて靴屋を往診。彼は聖母の恩寵を信仰しており、これまで医者の治療を求めたことはない。自分の咳が、代わりに働いている妻の安眠を妨げないよう、水薬の類を処方してもらいたい、という。父親の処方を思

い出して、この患者を回復する患者のように丁寧に扱ってみたが、再来の要請はなかった。

しかし、その後、国保の世話をした結果、疾病年金を受けられるようになり、往診依頼もあった。ビュルガーの投与する薬が良く利き、彼の肺は固まって快癒したも同然である。

患者（3）。気が狂ったような老婆の再来。自他についての感想や愚痴、また泣くかと思えば声を立てて笑った後で咳き込む。彼女の喉の奥には、ガラスの小窓のようなものが刺さっているのが見えるので、三週間以内に除去する約束をする。

患者（4）。陶磁器工場の鋳型工の娘ローザ・エーガー、一三歳。初回は母親が彼女を連れてきた。境目の悪い様態。ベッドから出さぬように母親に頼んだが、往診して見ると、冷えた床に座って弟妹と遊んでいた。左肺の半分が侵され、脈搏は早いし、熱はさらに上がりそうである。それから二〇日ほどたって、医院の診察室で金髪の変わった女性を診察中にローザの父親から電話がかかり、診察を中断してローザの下へ急いだが、その往診については記載がない。その一週間後、母親の報告では、ローザはビュルガーの診察を受けている間は元気そうな様子になるのに、ビュルガーが立去ると、それ以前よりも病状が悪化するので、見かけに惑わされないでほしい、とのこと。

患者（5）。教授の息子ルードルフ。熱、咳、血痰。苦い白色の錠剤を数回服用して症状は順調に回復していた。しかし、以前の主治医ヘールニヒトの異説に説得されて、ビュルガーの薬剤はしばらく服用していないという。その後、一カ月余りの後、教授夫妻が来院し、ルードルフの容態が思わしくないので、診察してほしい、ヘールニヒトの今後の来診は断った、という。診察の結果は心配するほどではなかった。ヘールニヒトの処方箋を見せてもらうと、血液を更新させるチンキ剤と肺病用シロップが記載されていた。しかし、その効果がないことが分かると、一変して

ビュルガーと同じ薬剤に転じ、しかもその一〇倍以上の分量を投与したのである。

患者（6）。金髪の変わった女性。二度目の来診で、ローザの父親からの電話によって診察が中断した患者。呼吸困難、眩暈、不眠などの症状。聴診器を当てながら、動悸がして、どちらが患者か分からぬほど。電話は、上半身裸の女性を前にして、甦った父親の諭し文句もブレーキにはならず、甘い陶酔に引き込まれ、丁度、前へ傾いてくる女性と抱き合いそうになった瞬間に電話がかかった。

一〇日ほど経っても、あの時の中断が悔やまれた。しかし不可解にも、それから一〇日も経たないうちに、ビュルガーの心を領していたのは、劇場で見た美しい未知の女性である。

患者（7）。その女性は、デパートのアクセサリー売り場の店員、ハンナ・コルネートである。初めての診察前の症状。悪寒、咳、吐血。吐血の再発防止に夜間何度も麻酔剤を飲まねばならない。初診から一カ月後には、ビュルガーは毎晩のように彼女のもとを訪れながら、往診であることさえ忘れ、看護も聴診もせず、一緒にワインを飲んだり、彼女の好きなロシアの強いシガレットを手土産にしたりで、一時的な陶酔へ誘うしまつだった。

患者（8）。未知の女性患者の肺炎の治療薬について、ドクトル・エーから相談される。しかし意見が合わないので、自分は自分でアルカロイドを自己流に合成したものを患者に服用させた。翌日、ドクトル・エーと再会。女性患者の熱は下がり、侵されている側の空ろな音も澄んできている。彼はビュルガーが策略を講じたとはつゆ知らず、自分の処方を自画自賛した。

患者（9）。一日中、村人の診療に追われ、終列車が来る時刻になったので、それに間に合うようにと正五時に馬車に乗って、駅前通りへ乗り入れたところで、農夫が近回りをして馬車を追ってきて、帽子を振って止まれの合図を

した。娘のところへ引き返してくれ、という。農家までの道のりは、言い分の二倍半の二五分もかかった。病人の体は死と闘うというよりはむしろ生と闘っていた。顔はすでに死人のように青白く、心音は胸の水泡音のためにかき消されていた。手元のモルヒネを思い切り多量に注射器に吸い上げたが、突然静かになって呼吸が止まり、注射の必要はなくなった。

結核に対する最初の有効な治療剤の生成は一九四四年のストレプトマイシンで、三剤併用療法が完成するのは一九五五年のことである。少なくとも第二次世界大戦終結までは、戦乱によって体調は崩れがちであり、結核の病状は悪化する一方だったであろう。サナトリウムでは、安静、栄養、定時的な散策による体調管理が行われていたが、一般の開業医では、口頭にせよ診断書にせよ、日常生活の区割りについて指示しても、それは実行できない空論である。患者は相当に病状が悪化して初めて診断を求めるわけである。その段階では、絶対安静が必要となると、肺以外の体全体が退化して、健康を回復する体力がなくなってしまう。有効な薬剤は皆無だが、医師は勝手に独りよがりに陥っている。従って、医師同士の対立は避けられない。そこまで来たら治りようがない患者には、モルヒネを投与して感覚を麻痺させる道しかなかった。

カロッサは、このような、患者の命を救えない部門の医業への従事と、生き甲斐を感受できる詩作との融和しがたい二つの道に片足ずつ掛けて、この自己分裂を解決できず苦慮していた。一九三〇年までには出版社の配慮によって生活は詩作に一本化され、二重生活は解消されるが、それはここで扱う段階ではない。

二　『ルーマニア日記』

（一）まえがき

パッサウの少々上流にあるドーナウ河岸のゼーシュテッテンで六年ほど開業中の末ごろ、母の死去もあり、気晴らしの旅で立ち寄ったニュルンベルクに魅入られて突然そちらへ転居したものの、間もなく体調を崩したため旧居へ戻った。それから程なく田舎暮らしに見切りをつけてミュンヒェンへの移住を決断したときは、一九一四年の夏が迫っていた。

この六月二八日にオーストリアの王位継承者夫妻が領有国ボスニア・ヘルツェゴビナの首都サライェーボでセルビアのナショナリストのグループによって殺害された。それから一カ月後にオーストリア―ハンガリーはセルビアに対し宣戦布告した。同年中にこの第一次世界大戦に参戦した国は、ドイツ（対ロシア、対フランス）、オーストリア―ハンガリー（対ロシア）、フランス（対オーストリア―ハンガリー）、ベルギー（対ドイツ・戦争状態）、イギリス連合王国（対ドイツ、対オーストリア―ハンガリー）、モンテネグロ（対オーストリア―ハンガリー、対ドイツ）、そして日本（対ドイツ）であった。ルーマニアが参戦したのは二年後の八月だった。ルーマニアがオスマントルコの支配から脱するのは一九世紀後半であって、先ず南東部のヴァラハイ（ムンテニア）と北東部のモルドヴァが連合侯国を経てルーマニア公国、そして一八八一年にルーマニア王国となった。しかし、すでに一二世紀には、中央の標高三〇〇～八〇〇メートルのソメシュ、ムレシュおよびオルト川流域にはジーベンビュルゲン系ザクセン人が入植し、またその他の地名にもドイツ語やハンガリー語が併記されたものが少なくなく、入植地であることを示している。

カロッサはまだ兵役検査を受けていないし、召集もされてはいなかったが、戦闘部隊の軍医勤務を志願する気が起こった。ミュンヒェンの軍務局に申し出ると、アウクスブルクの歩兵第三連隊で予備教育されることになった。その後、彼の希望に従って、軍医局から北フランスへの出動命令が出た。

北フランスへ到着した最初の日記の日付は一九一六年一〇月四日である。ドイツの対フランス宣戦布告は一九一四年八月三日であり、それから一年半後の一九一六年二月に始まったヴェルダンの戦いは七月一日にソンムの会戦へと移行した。カロッサの到着はそれから三カ月後のことである。ソンムでの滞在地は、この地方をイギリス海峡へ流入するソンム川とこれからアミエン付近から北へ結ばれた北運河に沿った場所で、例えばアム、カンブレ、ペロンヌ、バポームなどで、しかしその滞在はわずかに一〇日間にすぎず、一〇月一三日には早くもオービニ・オー・バックから列車に乗って退去となった。すでに八月二七日にオーストリア・ハンガリーに対して宣戦布告していたルーマニアの戦線へ投入されるという方向転換となったのである。一〇月一六日にライプツィヒを通過し、翌日、ドーナウ川に沿ってブダペストを通過し、ドーナウ川の支流ティソ川の支流ムレシュ川に沿って一〇月一九日夜半にトゥルグ・ムレシュに到着した。支度が済むと狭軌鉄道に乗り換え、さらに五時間ほどの旅程で東方のプライドへ向かう。しかし目的地が視野に入る地点で線路が破壊されていたため四時間の立往生を強いられた。駅前通りは避難民の行列で埋まっていた。そこへ三人の子供が担架で運ばれてくる。彼らは見つけた手榴弾を悪戯して爆発し、母親が死傷し、子供三人が重傷を負った。担架の後を追っていた祖母は当地ジーベンビュルゲンのザクセン人だった。

（二）作品の流れ

一〇月二〇日。休息日を活用して八月以来時期の来ているチフスの予防注射を学校の教室を借りて実施。しかし注射針は新しいものが届かず、使い古されて先が曲がっていた。わが身を見本にして使用に耐えることを示してから中隊全員に実施した。少々手こずったのは少佐に対してだった。

一〇月二一日。早朝プライドを出発する前に、少佐から坐骨神経の炎症に関して今夜中に全治する治療をしてくれと依頼された。カロッサは散薬の効能に思い至り、その投薬を予定した。昼すぎにビセリカニという村の手前に着いた。この村は数日前にルーマニア軍の侵入を受けたので、ドイツ軍の来着は歓迎された。しかし軍は村へは入らず、手前の草地に野営した。住民は備蓄の果実や牛乳を自宅から運んでドイツ軍にサービスした。また、そのお返しに村の病人たちの治療を求められた。救護車が開けられ、包帯材料と薬品が気前よく振る舞われたので、隊員の注意を受けた。

後続部隊に宿舎を取られないように、三時には村へ入ってそれぞれ部屋を確保した。病室勤務後、隊長に呼ばれ、発熱のため震えていたので、投薬しようとすると激怒して、「血中に化学物質を混入するほど不埒なことはないんじゃないか」と言った。それに対してカロッサは、病気になった動物が、普段は食べない草葉を探し求めて口にする事例を挙げて説得した。

一〇月二二日、五時出発準備完了。行軍は長く続いたが、少佐は休憩を取らなかったので、カロッサが副官に説得を頼んで解決した。休憩後さらに進軍するとオドルヘイウル・セクイエスクを通過した。そこは多くの建物が破壊され、まだ火災の臭いが鼻を突いた。敵はあわてて逃走したらしく、ドイツ製の高価な真新しいミシンが至る所に投げ

捨てられていた。野営した村の名は覚えていないが、すでに夕方から多数の隊員から極度の疲労を訴えられた。三日前のチフスの注射液の影響がまだ続いているせいだと判断された。

一〇月二四日。ハルギツァ山脈を越えるヴラギツァ峠（標高九八五㍍）を通り抜け、オルト川（南西でドーナウ川へ流入）を渡ったところにあるミェルクレア・チュクという町を通った。建物は破壊され、橋は爆破され、町の周囲を新しい墓標が囲んでいた。この日の宿泊地は不明である。翌二五日の四時すぎにコズメニに到着した。翌二六日の夕方、望遠鏡を覗くと前方川下にトゥルグ・セクイエスクと思われる街の明かりが見えた。

数日飛んで一〇月三〇日、戦闘演習を交えながらの急行軍の後、エステルニクに到着。ここには教会と別棟になった鐘楼とがある。特記すべきことはないままに翌日となり、五時進軍開始。先ず南東方向のブレックを目指すが、そこの小さな塔が目に入ったころ、停止命令が飛んで、宿舎へ戻ることになった。一〇時に出発点へ帰り着いた。カロッサの宿舎の主婦には一六歳ほどの肺を患う娘がいて、予期せぬ彼の帰営を喜んだ。診察はしたものの、病状からも、また戦時情勢からも期待を抱ける治療はありえなかった。

翌朝は夜明けの出陣という伝令が飛んだ。

一一月一日。昨日と同じ方向に進み、ブレック村に着いた。路肩には大勢の村人が出ていて、女性が多かった。老齢の男が自宅の戸口に立って、帽子を振りながら不気味なほど一本調子に、「神よ、ドイツ人を助けたまえ、神よ、ドイツ人を助けたまえ」と叫んでいた。

ここから戦場となっている国境の山脈へ入る。オイトゥズ峠（八六六㍍）を挟んで、北にはネミラ山脈（ネミラ山・一六四九㍍など一六〇〇㍍級）、南にはヴランセイ山脈（ラカウツィ山・一七七七㍍など）で東西が仕切られて

いる。カロッサの部隊は北のネミラ山脈の戦場へ登るが、彼が列挙している山名はハンガリー語のものであって、今日のルーマニアの一般的な地図には記載されていない。登山者向きなどの特殊な地図に記載されている場合以外は、アルファベットの頭文字だけの表記とする。

携行品は村に残し、陣地まで一五キロの山道を登る。九時に馬と馬丁とを残し、徒歩で登った。途中、ルーマニア人の多くの墓が立っていた。墓碑銘からすると、それらは一週間以内に立てられたものばかりだった。二時ごろ通った窪地には焼け落ちた一軒家があり、焼け跡はまだ燻っていた。焼け残った納屋の背後にビャクシンだけを飾った、十字架のない二つの墓があり、その周りを腰から上は丸出しのマジャール人らしい老女が亡霊に話しかけながら忍び足で歩いていた。しかし連隊は悲劇を推察しながらも立ち止まることなく霧の中を歩き続けた。

三時半にヴルフ・ボカ（一二〇四メートル）の山頂に着いたが、ここの山頂は双耳峰になっているので（実は別名の二峰）、中間の鞍部で休憩した。そこへ山の上から長い外套を羽織り、頭に厚い包帯をしたルーマニアの負傷兵が自発的に捕虜になるつもりでやってきた。首に巻かれた包帯とガーゼは血だらけで、傷口が開いて半分むき出しになっている。右目も膨れて黒ずんでいる。軍医の徽章に気付いた兵士はカロッサの前へ来て傷を指さした。カロッサは余計なことはせず、古い包帯の上に新しいものを巻いてやっただけである。ドイツの歩兵たちは受難の道をよろめきながらたどる敵兵の姿を嘲笑をもって見送ったが、実は内心、今日はお前でも明日は我が身だと自嘲していたのであろう。

一一月二日。九時行軍開始。しかし度々休憩して時間稼ぎをしているようだ。昼はムンテレ・ミク（一二六九メートル）の山頂に近い、新しい墓がたくさんあり、岩塊とビャクシンで覆われた平地で過ごした。そこへハンガリー軍の観測

将校が仲間入りした。彼は観測鏡で敵軍の動きを探索する。彼が所属する大隊の突撃目標であるL高地にピントが合わされた。しかしこのときも緑の軍服を着た敵兵の姿がまったく現れないので立腹気味だった。勧められるともなく、カロッサが観測鏡を覗き、小ネジを回すと、丘の上のビャクシンの藪陰で多数のルーマニア兵が塹壕を掘っている様子が映った。とっさにこれを観測将校に伝えようとはしたものの、職務が殺し合いをする兵士ではなく、治療をこととする軍医であるという自覚が本能的に働いたのか、自重しているうちに、昨夜休暇から帰来したというボスニアの大尉が現れて話題をさらったので、観測鏡はそっちのけになった。その後、野営地に戻る、とあるが、それは前日に設営した場所である。

一一月四日。朝食の際、マーマレードの壺に鼠の死体が入っていて大騒ぎになった。騒ぎの中心人物は少佐だった。昼過ぎ、伝令将校とともにL高地へ至る味方の最前線を見回った。突然、足元に横たわっている死体が目に入ると、その先は森中至るところ死体だらけであることに気付いた。それは昨日観測鏡に映ったL高地が中心だった。それらの死体はルーマニア兵ばかりであるが、オーストリア兵のものは埋葬済みだろう（とある）。

二人は全中隊を歴訪したが、途中でK中尉も加わった。伝令将校はオイトゥズ峠について説明した。カロッサの属するドイツ部隊が参戦する地域は、ジーベンビュルゲン東部とルーマニア領土との境界をなす、この峠から北へ伸びるネミラ山脈と、それから西へずれてさらに北上するチウクルイ山脈とで、両山脈の山麓をトゥロトシュ川が北部を区切って東側を流れ下っている。将校は、この高地を占領するのは、それ自体が目的ではなく、ここに敵の兵力を引き留めておいて、ドイツのもっと重要な前線の負担を軽減するためであり、休戦状態が長引いて士気が低下せぬよう、先手を打って攻撃の火ぶたを切らねばならないのだ、と強調した。

一一月六日。ムンテレ・ミク山に登り、大佐に到着を報告し、負傷兵一人を預かった。偵察の際、左から撃たれ、弾丸が肺の中に残っていた。しかし、治療やその結果についての報告はない。夕食時、包帯所の場所や作り方を相談する。

一一月八日。多忙な従卒たちを金と煙草で釣って手伝わせ、包帯所を作り上げた。

一一月一一日。第六、第七の両中隊だけのわずかな軍勢だけで勇猛な攻撃を加えてL高地をルーマニア軍から奪取した。敵はこれまでに七度逆襲を企ててこの高地の奪還を図った。その結果、負傷兵の搬出は困難となった。担架兵増強の要望を電話連絡したが、すべてが他の全線地区に配備済みで援軍の見込みがないことが判明した。負傷兵の救助が絶望的かと思われたとき、近くにいたハンガリーの士官候補生の助言があった。それによれば、ブレックにいるオーストリアの某大尉なら頼み甲斐があるという提言で、実際に十分な援軍と治療品の運搬を約束してくれた。

一一月一二日。朝六時。すでに包帯所は満員になっていたので、新しい負傷者は近くの谷間に運び、たき火で一時しのぎをした。死者は苔の生えている平地に纏めて横たえた。一週間前に全中隊を見回った時に途中から加わったK中尉も死体の中にあった。午後一時以降は戦闘が収まり静かになった。二時になってテントに入り昼寝をした。夕方になって、ボスニアの看護長が担架卒を引き連れて到着した。

一一月一三日。設営隊が夜明けにレムニアへ先発し、八時に後続隊がK高地を後にした。一〇時すぎたころ下方にエステルニクの鐘楼が見えてきて歓声が上がったとたん、上から馬上のオーストリア参謀本部付将校が追い付いてきて、止まれの号令に続いて引き返せの命令が出た。連隊長によれば、占領された高地がいくつもあり、これらを直ちに奪回しなければならない。オイトゥズ峠で木造の大きなバラックの宿舎に入った。直ちに少佐を訪ね、大隊勤務へ

の復帰を報告したが、少佐は再び体調を崩していたので、要望通り散薬の残りを与えた。
一一月一四日。七時、雨と霧の中を進軍。三人の兵が発疹チフスの疑いがあるとしてオイトゥズに残らねばならなかった。伝染病の媒介者である虱は、次第に悪魔的で抗しがたい本性を発揮して部隊を手こずらせている。チフスの予防注射は一〇月二〇日に実施されたが、この三人の兵も注射を受けたかどうかは不明。
一時に間近で銃声がした。弾丸が音を立てて飛ぶ。以前は税関だった建物の前で行軍を停止した。第三大隊がルーマニア軍と交戦中である。どの部屋も負傷兵で満員で、外の雨に濡れた草地や藁の上にも大勢横たわっている。僧侶が一人、瀕死の兵士を訪ね回り、遺言などをメモしている。
新任の連帯付軍医のところへ案内を乞い、破傷風血清を分けてもらって、お返しにモルヒネを少々与えた。
腹部銃創のドイツ人とルーマニア人計六人が別の藁の上に寝かされている。彼らは担架卒の到着を待つ間、連隊付軍医の勧めによって、一〇分毎に温湿布を交換してもらっている。
前線出動要請はないので、氷雨の中を谷に下って、敵から見られぬ山影にテントを張り、生焼けの腐りかけたパンにではあったが、リュックの底で眠っていたもらい物のマーマレードを分け合って塗り、満喫できた。
一一月一六日。夜中の一時半に起こされ、テントをたたみ、荷造りして出発。上り下りを繰り返してH谷に到着すると、大きなR山が見えた。そこは敵の本陣であり、そこからドイツ人の入植地であるジーベンビュルゲン地方を脅かしている。突撃は半時間内に行われねば永久にチャンスは失われる。少佐の指揮の下、進撃準備の後、ドイツ軍の突撃が歓声と共に開始され、集中射撃が始まった。居残った軍医その他は、その場を去った。すると休む間もなく夜が明けた。目の前には深い谷に抉られた円錐形の禿山があった。直ぐに通りかかったのは重症のドイツ兵を谷の方へ

運んで行くルーマニアの捕虜だった。と見る間に重症者や瀕死の兵士たちに取り囲まれていた。ともかく一刻の猶予もない。包帯所を急造しなければならない。とかくするうち榴弾一発が飛び込んで負傷兵二人に当たり死亡した。そこへハンガリーの大尉が通りかかり、近くの森の中に格好の包帯所があることを伝えてくれた。そこには軍医用の小部屋や二人のハンガリー人の見習い医官さえ待機していた。手当が始まったところへ、生憎にも少佐からRとともに高所にある命令所へ来いとの伝令が届いた。

二人はゆっくりと山を登り始めた。そこは暗黒と死の山で、斜面によっては戦闘が続行中で、銃声と叫び声が響いていた。足元には負傷者たちが倒れている。彼らはルーマニア語で、あるいはドイツ語で助けを求めている。中には二度目の銃弾を浴びる者もいる。その死の地帯をドイツの軽傷者たちがそれぞれ負傷の程度を示す体裁で下ってゆく。

指揮所の近くの花崗岩に伝令グラヴィーナが凭れ掛っていた。血の流れているところはないが、もう死相が現れている。傷口を探すと首に小さな弾片が突き刺さっていた。それから間もなく息が絶えた。彼の腰の脇に落ちていた伝令用紙を拾って目を通すと、職務関連の記事は見当たらなかったので、個人で預かることにした。命令所まで登って少佐と簡単な打ち合わせを済ますと、直ぐにH谷へ引き返すことになった。

途中、足元に倒れていたルーマニア兵に外套の裾をつかまれた。兵士の方の外套の胸を開くと、砕けた肋骨の下に胸の諸器官が露わになっていた。カロッサは外套を掛け直して、モルヒネを注射してやった。

午後一時頃になってH谷へ着いた。雪が降り続き、砲声は止んでいるが銃弾は相変わらず頭上の樹冠をぬって飛んでゆく。ボスニアの担架卒は現れず、救護所はマジャール兵とドイツ兵だけでもうほとんど余地はなく、重症でも

ルーマニア兵は外の雪の中で唐檜の茂みに横たえている。彼らの世話役にルーマニア軍の若いユダヤ人の衛生下士官を当てておいた。救護所の中は、血腥い臭いが鼻を衝いてきた。何もすることがなく手持無沙汰だったので、少し山の方へ登って、再び戻ってみると、ルーマニアの負傷兵たちの姿はなかった。ハンガリーの中隊長の計らいで、脇の山峡にある無人の芝小屋に移されて、食料も与えられたということである。

一一月一七日。待ちに待った担架卒が到着して、次々と負傷兵が運ばれていった。しかし歩兵ピルクルはほとんど脈もない状態なので、この場に留まり、追って死体となってオイトゥズへ運ばれるであろう。弟が一時間の暇をもらって兄を見舞ったが、もう先がないと見て墓穴を掘ったり、十字架の用意をした。

九時に白旗を掲げた僧侶に引き連れられて、銃と弾薬を担いだルーマニア兵一三人が現われて、ハンガリーの大尉に全面降伏を願い出た。

一一月一八日。夢うつつの一夜。夜中に一度目が覚めたとき、ネズミの姿を見た。彼らの動きを追っているうちに、かれらは喫茶店の玉突台の玉に変身し、二日前にモルヒネを注射してやった死んだはずのルーマニア兵が玉を突いている。そこへレギーナが姿を現したり、ルーマニア兵がグラヴィーナに似てきたりする。そんな夢が高潮した瞬間、外で榴弾が爆裂した。その弾に当たって一人のハンガリー兵が死んだ。

他方、歩兵ピルクルは二日間意識を失って寝ていたが、一〇回目の強心剤ジギタリスを注射すると、意識が戻り食欲も出て茶や缶詰肉も口にした。その結果、彼の頭蓋の弾丸は、内部までは入っていないと判断された。

一一月二二日。前夜、吹雪を突いてオイトゥズに下り、すでに真夜中にブレックに到着、朝まで休憩し、八時過ぎに行軍を再開した。戦死者が出たことで、街道に出ると、大隊の規模が貧弱化したことが歴然とした。チェターテ・

アルマーシュの手前に来ると連隊の軍楽隊の演奏で迎えられた。数日は平穏に過ぎたが、息苦しさを訴える者が多い。診察してみると、脈拍が不規則でしばしば途切れる症状が共通している。誰もが吉草滴剤で満足した。

一一月二八日。四時に南西方向のタルグ・セクイエスクへ移動する。

一一月二九日、夕刻。二九台のゴムタイヤのない自動車に分乗して、北北西方向のギメシュ峠を越えてオルト川上流からトゥロトゥシュ川上流域へ輸送された。途中、車輪が道路わきの溝に落ち込むなどで時間がかかり、ギメシュ峠越えの頃には夜が明けた。八時にルンカ・デ・ジョス村に到着。午後、東方から鋭い砲声が聞こえ、一時的だったが行軍準備の指令が出たものの、それは間もなく撤回された。

一二月一日。M山地を回る攻防（六万分の一ツアーマップにM山の記載はなく、これに近接したホッスーハヴァシュ山：一四〇五メートル：ルーマニア名ムンテ・デ・ルングは記載）はロシア軍とルーマニア軍に山地が占領されたので、こちらの大隊はそれを奪還しなければならない。行軍するうちに夜になった。第六中隊が逸れたということで、連絡を付けるため発火信号を送ったところ、敵に所在を察知され、榴弾による攻撃に合い、一人倒れ、S中尉も負傷した。中尉には、暗がりの中ではあるが、出来る限り丁寧に包帯を巻いた。一二時に乾燥した平地に着いた。馬で先行していた副官に迎えられ、敵は山の半分を放棄して塹壕を掘削中なので、夜間戦闘は不要となり、その近辺の農家などが宿舎として配分された。しかしその夜も、不用意な灯火を狙われて、一発であったが近くに砲弾が撃ち込まれ、建物が激しく揺れ、食器や窓ガラスが壊れ落ちた。

一二月二日。大隊本部と最前線との中間あたりにあるH地方を見渡せる憲兵衛兵所が空いていたので、そこが包帯所になった。各中隊が活動中、カロッサは睡眠不足を補う。目覚める直前にグラヴィーナの幻影が現れた。

雪は夕方まで降り続き、ロシア軍は陣地内にいて、動きがない。ドイツ軍は砲の配置を増やし、身構えている。

一二月三日。山頂を奪い合う戦闘が開始されているが、前線近くの主要道路にプロイセン衛生中隊がいて負傷者を引き受けているので、一人でいて暇なのでグラヴィーナのメモを読んだりする。

一二月四日。起き抜けにグラヴィーナのメモ、「我々をしてK山麓に墓丘を築かしめよ……」を詠みかけると、突然、ロシア兵、ドイツ兵入り交ざった負傷者がどかっとやってきた。第六中隊が霧でルートを誤り、M山頂への攻撃が遅れたため、山頂は依然としてロシア軍の掌中にある。包帯所と野戦病院との間は、大型の格子枠車が往来している。三時前に包帯所は空になる。三時を過ぎたころ、気が狂った歩兵のクリストルが連れて来られた。手におえない状態だったので、窮した挙句、手当たり次第まさぐるうちにスコポラミン溶液のアンプル数本が見つかった。幸い注射には抵抗せず、直ぐに効き目が表れて、これで一二時間は覚醒しないと判断された。

一二月五日。攻撃開始は翌日の予定になっているが、オーストリアの戦線がロシア軍によって突破されたため、出発準備の伝令が発せられた。負傷兵は直ちにパランカへ送られねばならない、と言うが、眠り込んでいるクリストルをどうしたらよいのか。

結局、夕方になって、敵の攻撃は撃退されたことが伝えられた。

一二月六日。未明、戦闘が始まり、順調に進行。九時以降M山上にはロシア兵の影はなく、彼らはMAまで退却した。明日はここの陣地をハンガリーの大隊が引き継ぐことになっている。

クリストルは、一一時に起こされて朝食を摂った。彼は軍医の証明書をもってパランカへ行き、そこからバイエルンへの帰国が決まっているのだと説明されると、それは彼の希望に反することで、ここに残るのが本心であるとい

う。カロッサの提案で、クリストルは担架卒への配置換えが承認され、電話でレヴェレンツ中尉に連絡したところ、中尉はクリストルにクリスマス休暇を出すつもりで、すでに鉄十字賞を用意したという。

一二月七日。正午交替してB谷へ向かう。（カロッサには東西南北の方向感覚が欠如しており、その表現に一切出会わないが、B谷はトゥロトゥシュ谷に下ると書いている。）三日後の滞在地名はパランカ、さらにその二日後の滞在地名はコシュネア、この日にハンガリー領とルーマニア領を出たり入ったりしながら通過するチュゲシュもトゥロトゥシュ川へ南西方向から流入する支流沿いにある地名である。B谷を目差して、各中隊は山道を行進するが、先ずはH川に沿って少佐と副官とカロッサの三人は乗馬で進むうち、包帯が緩んで出血している負傷兵に追いついたため、カロッサだけその手当で遅れた。その先で何台もの荷車を引いた農民の一群に出会った。この一群の指揮を執っているのは、一週間前に出会った、見覚えのある大柄の女だった。情報交換するうちに、彼女は荷車に積んだ袋から一掴みの乾燥梨をくれたので、手持ちの唯一の食べ物である軍用パンをそのお返しに差し出すと大変喜ばれたようだ。四時半に宿舎となる農家についたが、そこは戦線後方一一キロの地点である。

一二月九日。納屋で健康診断中、アル中になった家の若い主婦が入って来た。彼女は前日、隊員にワインが配給された際、それを牛乳と卵を差し出して分けてもらい、この日飲みすぎて足元が緩んだらしい。診断の仕事を済まし、中庭へ出ると、出動命令を持って来た伝令上等兵の後に続いてルーマニア人の服装をした老人が瀕死の赤ん坊を抱いて入ってきて、洗礼を授けてくれるよう求めた。そこで、牧師補のシュテルツァーに思い当り、彼を呼んで赤ん坊を託した。その後、大きな山がロシア軍に占領されたため、出動命令は頓挫した。

一二月一〇日。パランカ。電話で行軍中止命令がきた。宿舎のトゥロトゥシュ川の凍っていない河岸には、流水に

浸かっている砂利が光って見えた。子供へのお土産にと思いつき、河岸へ降りて砂利を拾い上げてみると、砂利の輝きは消えていた。それでも思いを込めて、二、三ポケットに入れた。それから川沿いの樹林帯を散策して自然を鑑賞した。

一二月一二日。午前中は雪が降り続き、一二時を過ぎてからやっと止んだ。それから間もなく、重砲の発砲音が谷間に響き渡った。二時に進軍命令が出た。トゥロトゥシュ川に沿って、ハンガリー領とルーマニア領とを縫い合わせるようにして進んだ。一時、ロシア軍の視界に入り狙い撃ちされたが、幸い榴弾はそれて流路に落ちて炸裂したが、負傷者はなかった。チュゲシュでは休まず通過し、それから枝谷へ折れて次第に傾斜の増す山道を登った。登り切って一休みしていると、パランカで隊に加わった新米の歩兵が体調不良を訴え出た。新米の弱気に対して隊からは激しい罵言が浴びせられた。そこへ駆けつけたデームの賢明な計らいで騒ぎは収まり、カロッサによる打診、聴診、検温というありきたりな診断の後、病兵カードを首からぶら下げて、一人でパランカへ返された。

目的の村コシュネアへ通じる道は国境外の東部から分かれるので、国境内のチウゲシュを通る道を南へ進んで、途中から間の尾根を越えないとコシュネアへは出られない。二時に出発して、村に着いたのは一一時で、副官、軍医補、伝令将校その他数人とともに一軒屋の大きな部屋に入った。そこでは住民の母親と二人の娘と同居だった。戦況は不明だった。

一二月一三日。朝起きてから、手帳にいつも何か書いていることについて咎められた。軍事上のことであると、捕虜になった場合には大ごとになりかねない、と。

突然、砲撃が始まったので、八時に出発したが、小一時間でコシュネアへ戻った。しかし、そのまま戦火を浴びて

いない別の地帯へ行軍を続けた。が、谷には自然を感じさせる小鳥の群ればかりではなく、プロシャ工兵の小屋が点在し、やがて戦争の痕跡が現れてきた。また次いで氷の中から壊れた車輪と砲架が突出し、その脇には砲口が歪になったり裂けたりした砲身があった。また馬の骸骨ばかりでなく、雪の中からルーマニア兵の軍帽を被った頭だけが飛び出していた。誰もがその辺りの地勢には不案内で、自信がないままに進んでゆくと山がいくつも見えてきた。谷を東の方向で立ち塞いでいるのがV山である。この山上に前々日、ロシア軍が陣地を構築したという。道が二股になったところに蒸気製材所と付属建物があり、そこにドイツとオーストリアの弾薬が大量に積み上げてあった。敵の弾丸一発で大事になる危険物の放置に対して少佐は激怒した。しかし、これを片付ける人手も余裕もなかった。そこから半時間で板小屋に着いた。そこはカロッサと部下との当面の宿泊所である。ここで本部付軍医Sと交替する。Sから過去数日の体験を聴いた。V山を巡る攻防で、ドイツ人の小隊長が仆れ、部下にも捕虜になった者、あるいは殺傷された者もある。S本人は着の身着のままで逃げ延びた。結局V山頂は奪われた。少佐の提案に沿って、より安全な山麓に下って、そこに包帯所を作ることになった。

一二月一五日。朝。キルギス兵が山頂の森一帯に鉄条網を張り巡らし、彼らからはドイツの陣地は丸見えだと、味方の負傷兵が情報をもたらす。昨日の午後は五人の死者が出たので、わが軍は昼間は岩陰に伏せるようにして屈んでいなければならない。

一一時。少佐と本部付軍医の推測通り、ロシア軍は小・中口径弾を道路へ向けて撃ち始め、間もなく数人の歩兵が犠牲になった。今いる小屋は一時間ともつまいという予測で、包帯所をVへ移動させるか否かの問い合わせの任を、単独の方が狙われまいとの判断で、レーム一人が背負うことになった。

一二時。他の者はすべて小屋を出て、山峡のオーヴァーハングした岸壁の陰を選んで寝ていたが、カロッサは、相変わらずグラヴィーナのメモに気を取られて手間取っているうちに外に榴弾が落下して小屋がメリメリ音を立てて揺れた。左手に紙片を、右手にワインのグラスを持って川を渡ってくるタイミングに失笑を買った。後を追うようにして榴弾が続き、板小屋は吹き飛ばされた。

二時。包帯所の山上への移動について問い合わせに一人で出かけていたレームが無事に帰ってきた。すると少佐から、次の砲撃の合間を見て、包帯所をコシュネアへ移せと、逆方向への命令が出たことが伝えられた。この場所が危険なことは、H中尉の部署からも望遠鏡で見てとれて、全員が死傷したものと覚悟したそうである。状況は耐え難いものである。「噂では、ドイツ皇帝が敵に休戦を申し出たそうだ」、とカロッサは書いている。コシュネアへ移動の準備。

三時。二時半以降、ロシア軍が砲撃を休止している間に、適当な間隔を置いて後退を始め、製材所まで後五〇〇歩あたりまで漕ぎつけたところで、コシュネアの手前に組まれていたプロイセンの砲列の一組が発砲し始めたところ、これに対してたちまち敵の返砲を受け、行き場がなくなり、製材所へ向けて駆け込むしかなかった。しかしその手前寸前で榴弾が製材所に命中し、弾薬庫でもあった製材所は爆発が爆発を呼んで近寄りがたいものとなった。小男のリュッティヒは肩を打ち抜かれ、モルヒネの甲斐もなく仆れ、上等兵のユンカーは破片で耳下腺を打ち抜かれ、カロッサ本人も左手にかすり傷を負ったが、その前に爆風で地面に打ち付けられたときは、幸い無傷で済んだ。七時にはコシュネアに着くであろうという予測だったが、実際に到着したのは一〇時だった。この間の数時間、カロッサはグラヴィーナの、「K山の麓に塚を建てよう。霜の降りた岩とビャクシンの高原に、戦死者のために記念碑を建てよ

う」で始まる、欧文（印刷）で二頁余りの手記を、傍聴者の存在を確認すると次第に声を高めて朗読した。コシュネアに着いたのが夜一〇時であり、手記の最後を読み終わったのが一一時である。

ルーマニア日記は以上のように一九一六年一〇月四日から始まり、同年一二月一五日までの約二カ月半の記載である。しかしカロッサはここで退役したわけではなく、この後の従軍について、『指導と信従』に略記している。この年末の山岳戦の後、彼らの前線地区は突然静寂になった、という。ルーマニアが宣戦布告したのは八月末であるが、すでに一カ月後にはシビウ会戦で大敗を喫しており、一二月六日のアルゲシュ決戦がルーマニアの最後の抵抗となり、首都ブカレストへの勝利軍の入城となったのである。従って、『日記』の一二月に入って以降は、対戦相手はロシア軍だけで、ルーマニア軍の記述はない。しかも、年の瀬が押し迫ると、翌年の二月革命へ向けて、ロシア軍も国内へ回帰して行ったのである。

従って、この冬、ルーマニアに残留した中欧諸国軍は暇を持て余しがちで、カルタやトランプに耽って暇を潰した。カロッサはハンガリー語やイタリア語を学び、この『日記』を書き進めたという。しかし、一年余りの空白の後、北フランスの戦線へ移送され、ルーデンドルフの「絶望的な作戦に……ぶち込」まれた。レイエ河畔のメルヴィーユ近郊のル・サール村でイギリス軍の銃撃を受けて左腕に負傷した。なんとか本部包帯所までたどり着き、満員の病室に収容され、銃弾の摘出手術を受け、その後もいくつもの野戦病院を移動してから、ようやくミュンヒェンへ帰り着いた。

カロッサは本来肺病医でありながら兵役検査を受けずに志願して軍医となったが、一般兵士は兵役検査に合格しているので、特に肺病にはなりにくい体質のはずである。軍医が扱う病は内臓ではなく、先ずは外傷である。兵役検査も受けず、専門分野が軍医向きではない、となれば、前線勤務を前にして面接に当たった師団軍医監がアウクスブルク送還命令書に署名しかけたのもむべなるかなである。

（三）まとめ・B

医療（1）。プライド。曲がった針しかないが、大教室を二部屋借り切って、中隊全員にチフスの予防注射を実施。少佐の扱い方が一つの問題点。

医療（2）。プライド出発前に、少佐に診断を求められ、今晩のうちに坐骨神経の炎症を全治させるように要請される。マレタン―ラウダノン散薬の残りがあることに思い至る。

医療（3）。ビセリカニ。発熱で隊長に呼ばれ、散薬を投与。

医療（4）。エステルニク。宿舎になっている民家の二階の一室。一六歳ほどの肺病の娘。

医療（5）。戦場の山へ向かう途中、下ってきたルーマニアの負傷兵。外套を着ているが、首から頭にかけてはターバンのように包帯が巻かれている。しかし、ずれた包帯から傷口がはみ出している。カロッサは古い包帯の上から新しいのを巻き重ねてやった。

医療（6）。弾丸が肺の中に残っている負傷兵。治療の具体的記述なし。

医療（7）。ムンテレ・ミク（山）の中腹に包帯所を作って数日後にはすでに負傷者で満員になっていた。新たな

負傷者と死者は野外へ横たえるしかなかった。負傷者には痛み止めとして軽い麻酔剤を配り、たき火で寒気から守る。死者の中には、一週間ほど前に中隊を一緒に見回った若いK中尉もいた。

医療（8）。再度、少佐に散薬を投与。

医療（9）。兵三人、発疹チフスの疑い。治療への直接のタッチなし。

医療（10）。倒れている伝令グラヴィーナを発見。首に弾片が刺さり、直ぐに息が止まったので、打つ手はなかった。ポケットから落ちたらしい伝令用紙を拾って、これを大事に持ち歩いた。グラヴィーナの手紙からの引用句「蛇の口より光を奪え」が、この作品の裏表紙を飾っているが、グラヴィーナはここでの瀕死状態が初登場である。

医療（11）。山を下る途中、倒れているルーマニア兵に外套の裾を捕まえられた。肋骨が打ち砕かれて胸の内部がむき出しになっている。瀕死の敵兵にモルヒネ注射を施す。

医療（12）。H谷の救護所は負傷兵で溢れた。息抜きに散策している間に、ハンガリーの中隊長の機転で、捕虜を別の芝小屋へ移し、食料も分配した。翌朝、担架卒が到着して、負傷者はオイトゥズ峠へ運ばれた。

医療（13）。頸椎に損傷を受け、無意識状態で二日間包帯所で寝ていた歩兵ピルクルに一〇回目のジギタリスを注射すると、脈、呼吸、意識がともに回復し、茶も缶詰肉も平らげて、外へ起き出た。

医療（14）。チェターテ・アルマーシュで、営内病室へ胸苦しさを訴え出た多くの兵士を診察。頻繁な鼓動の結滞。カノコソウの滴薬を投与。

医療（15）。行軍中、発火信号で敵に所在を察知され、河原で榴弾を受けてS中尉が負傷。暗がりでできる限りの手当。

医療（16）。M山頂のロシア軍を撃退予定のドイツ第六中隊が道に迷って遅れたため攻撃に失敗し、両軍の負傷兵で包帯所は多忙となるが、彼らは格子枠車で野戦病院へ移送される。

医療（17）。午後三時頃、気が狂って連れて来られた歩兵クリストルにスコポラミン溶液を注射。二四時間以上たって、翌夕、クリストルは目を覚ましたが、顔を数回さすると、また眠った。その翌日、カロッサがクリストルの配置換えを少佐に提案し、担架卒になることが承認された。

医療（18）。各中隊は山道を行進し、少佐と副官とカロッサが川沿いに進んでいると、包帯が緩んだ負傷兵に追いついたので、一人遅れて手当する。

医療（19）。新米の歩兵が体調不良を訴え出る。すると、周囲から悪口罵言を浴びせられる。そこへ下士官のデームが駆けつけて、荒れた状況を一転させ、カロッサの診断のおぜん立てをする。

医療（20）。製材所の近くで、プロイセンの砲撃に対する返砲で上等兵のユンカーは耳下腺を打ち抜かれ、カロッサも左手にかすり傷を受けたが、どちらも出血はすぐに止まった。他方、リュッティヒは肩を打ち抜かれたので、丁寧に包帯を巻き、モルヒネを注射した。しかし、夜が更けた一一時過ぎ、カロッサがグラヴィーナの詩を朗読し終わった後、リュッティヒが突然立ち上がってよろめいてから卒倒して絶命した。

（四）むすび

軍医として従軍し、最後はフランス戦線へ回され、腕に銃弾を受けて負傷し、野戦病院を巡り巡った後、ミュンヒェンにたどり着いて暫く経った頃が八月某日だという。それはアミアンの戦いの時期であり、当然ドイツ軍最高司

令部はすでに戦争の続行を見込みのないものと判断していた。一一月九日にはベルリーンでドイツ革命が成立し、皇帝は退位し、共和国が宣言され、一一月一一日には北フランスの都市コンピエーニュで停戦協定が締結された。

ルーマニアは一九一六年八月に対中欧諸国に宣戦したものの、一二月初めには講和締結へ追い込まれて、国土は矮小化されたが、戦後のパリ近郊国条約によるジーベンビュルゲンの編入など、急激な国土の拡張への対応に苦慮せざるをえなかった。

テクストおよび参考文献

1 Hans Carossa: Die Schicksale Doktor Bürgers. insel taschenbuch 1462. Erste Aufgabe 1992.
2 Hans Carossa: Rumänisches Tagebuch, dito.
3 Hans Carossa: Führung und Geleit. Bibliothek Suhrkamp. Erste Auflage 1980. Lizenzausgabe mit Genehnigung des Insel Verlag.
4 Henning Falkenstein: Hans Carossa. Köpfe des XX-Jahrhunderts. Band 98 Berlin, Colloquium Verlag 1983.
5 Der große PLOETZ: die Daten-Enzyklopädie der Weltgeschichte. Date, Fakten, Zusammenhänge. 32., neubearbeitete Auflage.
6 Superatlas Romania 1: 300000 freytag & erndt in Austria.
7 Wanderkarten 1. Munţii Ciucului Şi Zona Ghimeşului 1: 60000, Dimap-Zsigmond. Budapest 2014.
8 Wanderkarten 2. Munţii Nemira 1: 60000. Dimap-Zsigmond. Budapest 2007.